朝日新聞　2014.6.24

小児ネフローゼに新治療法

神戸大など　ステロイド副作用抑制

尿から高たんぱくが出て体がむくむ小児ネフローゼ症候群の新たな治療法を、神戸大や国立成育医療研究センターなどのチームが開発した。従来の治療で長期間使われるステロイドの使用量を減らし、深刻な副作用を抑えられると期待される。23日付の英医学誌ランセット電子版で発表した。

小児ネフローゼ症候群は、血液中のたんぱく質が尿と一緒に流れ出てしまうためにたんぱく質濃度が低下し、むくみや腎臓障害などの症状が出る。年間1千人が新たに発症。ステロイドの投与で症状が改善するケースが多いが、投与を続けると低身長などの成長障害、高血圧、緑内障や骨粗鬆症などの副作用が出る。

飯島一誠・神戸大教授は、体内で抗体と呼ばれるたんぱく質を作り出すリンパ球「B細胞」の働きを抑える薬で、悪性リンパ腫などに使われる抗がん剤「リツキシマブ」に注目。難治性の患者を対象に臨床試験を実施し、再発の頻度やステロイドの使用量を半分以下に抑えられたなどとして、リツキシマブを難治性の小児ネフローゼ症候群にも使えるように申請した。今秋にも国から審査結果が示される見通しという。

（下司佳代子）